

# 福岡工業大学 機関リポジトリ

## FITREPO

Title	充実した生活のための心の環境づくり：佐藤一斎の『言志四録』を主要なてがかりとして
Author(s)	上寺 康司
Citation	福岡工業大学研究論集 第40巻2号(通巻60号) P277-283
Issue Date	2008-2-29
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11478/285">http://hdl.handle.net/11478/285</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

Fukuoka Institute of Technology

# 充実した生活のための心の環境づくり

～佐藤一斎の『言志四録』を主要なてがかりとして～

上 寺 康 司 (社会環境学科)

## Making the Environment of a Heart for Substantial Life ～Focused on the *Genshishiroku*, Written by Issai Sato～

Koji KAMIDERA (Department of Social and Environmental Studies)

### Abstract

Human daily life unfolds by interaction with ones own environment. There are natural environments, cultural environments, and an environment closely related to the social environment of ones daily life. Therefore, it is necessary to make substantial interactions with this social environment, and in such manner the human being is able to live a substantial life. In this article, the auther considers how to make the environment of a heart for the human being, in order to live a substantial life through interactions with the social environment. Author focuses in particular on the *Genshishiroku* (言志四録), written by Issai Sato (佐藤一斎), a symbol of the Confucianism in the Edo period.

Key words: *Genshishiroku*, social environment, environment of a heart, Issai Sato

### 1. はじめに

人間の日々の生活は、自らの環境との相互作用によって展開している。人間の環境には、自然環境、文化環境、社会環境があり、その中でも、日々の生活と密接な関わりのある環境が、社会の中における他の人間や物事とのかかわりとしての社会環境である。人間が充実した生活を送るためには、この社会環境との相互作用を充実したものにする必要がある。

本稿では、社会環境に身を置く人間が、社会環境との相互作用を通して充実した生活を送るための心の環境づくりについて、先人のおしえをもとに、若干の考察をこころみる。

まず、人間と社会環境との相互作用について、現代アメリカのプラグマティズムの哲学者・教育学者であ

るジョン・デューイ (John Dewey, 1859～1952年) の思想を中心として、展開する。

次に、本稿の中心をなす人間と社会環境 (以下においては、社会環境を単に環境と記す。)との相互作用を通しての心の環境づくりについて、江戸時代の儒学者で昌平坂学問所の儒官を務めた佐藤一斎 (1772～1859年) の思想を中心に展開する。佐藤一斎の思想として取りあげるのは彼の主著『言志四録』である。

本稿において佐藤一斎の『言志四録』に焦点をあてる理由について、佐藤一斎のプロフィールとあわせて以下に記述する。

佐藤一斎は、自らが生涯にわたる「学び」の体現者であった。というのは、佐藤一斎は70歳にして、その当時のトップの学問・教育機関である昌平坂学問所の儒官に登用され、88歳で亡くなるまで、知力・気力衰えず、重職を全うしたからである。彼の主著には、『言志四録』がある。『言志四録』は『言志録』、『言志後録』、『言志晩録』、『言志耄録』の4冊からなり、全編1133

条であり、41年間にわたり一斎が筆録した随想録である<sup>1)</sup>。

『言志録』は、一斎が42歳の時（1813（文化10）年）に書き始めて約11年間にわたり書き記した246条からなるものである。『言志後録』は、一斎が57歳以後、約10年間にわたって書き記した255条からなるものである。『言志晩録』は一斎が67歳から78歳までの約12年間にわたって書き記した292条からなるものである。『言志盡録』は一斎が80歳の時（1851（嘉永4）年）に起稿し2年間で340条を書き上げたものである<sup>2)</sup>。

『言志四録』は、人間としての「学び」の修養・工夫からにじみでた随想録、人生の書、人間としての在り方生き方を指南した書として、多くの人に読み継がれてきた。また、今日の生涯学習社会にも有用な「学び」の知恵が豊富に盛り込まれている。全体を通して寸鉄録風にかかれた条文によって構成され、条文それ自体や、条文を構成する一節、さらにそれらに内包された漢語そのものが、人間の心に響き、影響を及ぼし、人間の「学び」に有用と思われる。

この『言志四録』には人間の行動力・実行力の源泉としてのパワーが内包されている。そのことについては、西郷隆盛を始めとする明治維新の実現に尽力した幕末の多くの志士たちに愛誦されたこと、特に西郷隆盛が、『言志四録』から会心の101条を抜粋、抄録し、絶えず座右に置き、自らの行動の指針としたことから明らかである<sup>3)</sup>。

なお、本稿で取りあげる『言志四録』の条文の書き下し文については、岡田武彦監修『佐藤一斎全集』第11巻（明德出版、1991（平成3）年）、同じく同氏監修の『佐藤一斎全集』第12巻（明德出版、1991（平成5）年）に従った。

## II. 人間の日々の生活＝環境との相互作用

人間は環境との相互作用を繰り返しながら日々の生活を送っている。人間と環境との相互作用こそが人間の経験であり、この経験したことを反省的に思考し、そこに「学び」（気づき）が生じ、自己反省・自己改善・自己変容へと、すなわち自己の成長につながる。

人間は環境に対してはたらきかける。それは環境に対する具体的な行動である。この行動が環境に対する作用であり、環境は、人間が行動として及ぼした作用に対して、具体的な結果としての反作用を人間に対して及ぼす。人間の行動とそれに対する具体的な結果と

は、作用と反作用の関係性があるので、まずもって人間が充実した生活を送るための前提としては環境に対する自らの行動の矢印を太くすること、すなわち行動力をつけることが肝要となる。行動するかどうか、人間は迷いが生じる。しかしながら、行動しなければ物事が具体的に展開しない。なぜ行動するのに躊躇するのか。それは行動に対する結果、すなわち環境からの反作用が怖いからである。自分の思い通りの結果にならなければどうしようと心配するし、結果に落ち込むことをおそれるからであろうと思われる。そこで人間が行動するに際しては、結果を受け止める勇気が必要となる。結果に対して動揺する自分や落ち込む自分をありのままに受け入れる勇気である。行動する矢印を太くすることとは、人間の内面にある行動する勇気を大きくすることに他ならない。

環境に対して具体的な行動をとることを通して、具体的な結果を求めることの重要性について、詩人で書家の相田みつを氏（1924年～1991年）は、「ともかく具体的に動いてごらん。具体的に動けば具体的な答えがでるから。」<sup>4)</sup>という詩で表現している。またデューイは、「為すことによって学ぶ。」（Learning by Doing.）、「経験から学ぶ」（Learning from Experience.）という有名な言葉を残している。デューイは、「経験から学ぶ」ことについて、「われわれが事物に対してなしたこと、結果としてわれわれが事物から受けて楽しんだり苦しんだりしたこととの間の前後の関連をつけること」<sup>5)</sup>と述べている。鎌倉時代の曹洞宗の僧であった道元（1200年～1253年）は、自らが著わした『正法眼蔵』の中で人間が具体的な行動を通して、認識することを「冷暖自知」と表現している。また江戸時代の幕末期に米沢藩の藩政改革を成し遂げた上杉鷹山（1751年～1822年）は、具体的に行動することが物事を成し遂げる際に必要であることを、「なせば成る なさねば成らぬ何事も 成らぬは人のなさぬなりけり」という自らの道歌で著わしている。

このように人間が充実した生活を送るための前提としては、自らの環境に対して、具体的な行動を通して積極的に働きかけることが重要である。

以下の節においては、佐藤一斎の『言志四録』を主要に取り扱う。

### Ⅲ. 人間は自らの環境から学ぶ

：自らの環境から学ぶ心（すべてに学ぶ心）

＝自らの環境に対する感謝の心

（すべてに感謝する心）の保持・涵養

人間は、自らが身を置く環境との相互作用を通して日々の生活を営んでいる。前節では、環境に対して具体的な行動として積極的に働きかけることの重要性を指摘したが、この節では、環境が人間に及ぼす働きに焦点をあてて論じていく。

人間は、自らが身を置く環境、則ち接する人・取り扱う物・事等との関わりの中で日々生活している。これらの人・物・事を環境からの働きかけととらえることもできる。これら環境からの働きかけを受けとめる心の環境づくりが必要となる。すなわち、自らの環境を自らを磨いてくれる砥石、人間的に成長させてくれる糧、ととらえる。換言すれば、自らの環境を自らの「学び」の対象ととらえ、自らの環境から学ぶ心を保持・涵養することである。人間が自らの環境を、自らを磨いてくれる「学び」の対象ととらえること、環境から学ぶ心を保持・涵養することは、自らの環境に対する感謝の心を保持・涵養することに他ならない。佐藤一斎の『言志四録』には環境を「学び」ととらえる有名な条文がある。それが『言志晩録』第263条である。

○多少の人事は皆是れ学なり。  
 人謂ふ、近来多事なれば学を廃す、と。  
 何ぞ其の言の繆れるや。  
 （『言志晩録』第263条）

【大意】世の中の多くのことがらは、すべて、人間を成長させてくれる学問である。よく人は「最近、忙しくて学問をすることができない。」と言うが、その言葉は間違っている。（自らのあらゆるものが学びの対象であるから、「人事」がまさに学問である。）

この条文では、自らの環境すべてを、自らを人間的に成長させてくれる「学び」の対象ととらえ、そして自らの環境に感謝する心を涵養することが伺える。また日常の「学び」を積極的に推進する心の要素がすべてに学ぶ心であり、すべてに感謝する心であることが理解できる。反省の矢印を自分に向けて自己改善、自己変容、自己向上を図る。このことこそが「学び」の

極意である。換言すれば、日常生活即学び、人生即学び、人生即人間形成である。自らの環境、すなわち自らの周りのあらゆる人・物・事が自らを磨く砥石であり、自らを磨いてくれる「学び」の対象である。自らが環境との相互作用の中で「カチン」ときたら感謝する。この「カチン」こそが自己の改善点に対する警鐘であり、厳しく指導してくれる人、苦言を呈してくれる人、注意してくれる人を「自らを磨いてくれる人」ととらえて、感謝の念を惹起させることが肝要なのである。瞬間的に「カチン」ときてもかまわないので、できるだけ早くに感謝の念をわき起こすことが肝要となる。また、自らにとって厳しい事・いやな事・つらい事・めんどくさい事に感謝する。自分の弱いところが明らかになるからである。自らの課題が明らかになるからである。環境に対しての積極的な精神・姿勢・態度の創出であり、プラス思考、前向きな姿勢の涵養である。

さて、積極的な精神（心）とは、自らの環境改善が自らの心の環境改善に在ることの認識にたつて、真実の自分で生きる、「日々是好日」の世界で生きる精神である。すべての人・物・事を前向きにとらえる精神である。環境から学ぶ心、環境に感謝する心のつきつまる場所は、自らの環境、すなわち自らが接する人や物・事を「活かすこと」にほかならない。そのためにも自らの心の環境を積極的な状態とし、心の開陳につながる発する言葉には吟味を要し、決して消極的な言葉を口にしないことが肝要となる。また環境に対する不平不満を絶対に口にしないことである。

自らの環境のなかでも、厳しくつらい環境としての「逆境」に身を置くことがまた、自らの成長の糧となることについては、洋の東西を問わず、よく言われることである。

佐藤一斎の『言志録』第59条には、そのような逆境が自らを磨く恰好の糧となることを記している。

○凡そ遭う所の患難变故、屈辱讒謗、弘逆の事は、  
 皆天の吾才を老せしむる所以にして  
 砥礪切磋の地に非ざるは莫し。  
 君子は当に之に処する所以を慮るべし。  
 （『言志録』第59条）

【大意】およそ人間が遭遇するところの、わずらわしく難儀な出来事や、屈辱的なこと、いわれのない誹謗中傷、思うようにならないことは、すべて、天が

人間自らを磨き成長させるために与えたものであり、人間を磨き上げる場に他ならない。従って、徳の高い人格者としての君子は、これらの逆境の中で身を処していくことを深く考えることが肝要である。

まさに、「患難かんなん变故へんこ、屈辱くつじやく讒謗ざんぼう、弘逆ふつぎやくの事」としての逆境こそが「天あまの吾才わがさいを老せしむる所以ゆえん」であり、「砥礪しれい切磋せつさの地」すなわち人間を磨き上げる場に他ならないのである。西洋のことわざにも「艱難かんなん汝を玉にす。」(Adversity makes a man.)や「逆境は最良の教師なり。」(Adversity is a good teacher.)がある。日常生活・人生における「逆境」(厳しく辛い環境)は「学び」の最大のチャンスなのである。逆境は、人間に知恵をもたらし、創意工夫の精神を高め、それをを努力へと転嫁する。

#### IV. 「学び」=環境に対する瞬間の善処

自らの環境を「学び」の対象ととらえ、自らを磨いていくことの重要性を述べてきた。環境を「学び」の対象ととらえるためには、自らの感性を高め、「学び」の瞬間、「学び」の機会をつかむこと、「学び」に対する瞬間の「気づき」が肝要となる。

このように、「学び」に対する瞬間の「気づき」、自らの弱いところ、改善すべきところの「気づき」と即座の自己改善の重要性を、佐藤一斎は『言志後録』第34条にて、明解に述べている。

○克己の工夫は一呼吸の間に在り。

(『言志後録』第34条)

【大意】自分に打ち克つための工夫は、一呼吸という瞬間に在る。

この第34条にみるように、自己の成長のポイントは「学び」の瞬間をつかむことに在る。瞬間瞬間を大切にす。瞬間の善処が肝要となる。新渡戸稲造(1862年～1933年)が実践した<sup>9)</sup>ごとく、「ここだな!」という瞬間を意識し、即改善する。それが必要となる。

さて、自らの「環境」を「学び」の対象ととらえ、瞬間瞬間を大切にすためには、心が絶えず、まわりの環境と向き合っていないと行けない。佐藤一斎は『言志晩録』第175条で、目の前の現在のことに向き合

うことの重要性を指摘している。

○心は現在なるを要す。

事未だ来らざれば邀むかふべからず。

事已ことすでに往けば追ふべからず。…

(『言志晩録』第175条)

【大意】心は、現在のことに向き合っていることが肝要である。物事がまだ訪れていないのであれば、心をそちらに向けてはいけぬ。また、事がすでに済んでしまったのならば、後悔してはいけぬ。

「心が現在」であれば、目の前のことに心を発動させることが可能である。人間は、現在の一瞬一瞬を生きている。目の前のことをていねいに真心を込めて取り扱うことが肝要であり、一瞬一瞬を真剣に生き抜くことが肝要となる。

#### V. 自らの環境づくり=自らの心の環境づくり

自らの環境づくりはすなわち自らの心の環境づくりである。佐藤一斎の『言志後録』第16条には次のように述べられている。

○人あるい或は謂いふ、外物累がいぶつるいを為なすと。

愚ぐは則ち謂いふ、万物は皆我れとばんぶつ同体にして、

必ずしも累るいを為なさず。

蓋けだし我れ自ら累るいするなり、と。

(『言志後録』第16条)

【大意】人はよく、自分の周りのさまざま物・事が自らを煩わせる、と言う。私は次のように言いたい。すなわち自分の周りのあらゆる物は皆自分と同一のものであって、周りの物がわずらわしくなっているのではない。思うに自らの心が周りの物・事からいらぬ影響を受けて、わずらわしくなっているのである。

この条文では、自らの環境づくり(改善)は、自らの心の環境づくり(改善)に在るということを示唆しているのである。自らの環境は、自らの在り方生き方や具体的な行動の結果が現象化したものである。自らの環境を変容させるための前提には、自ら(の心)を改善・変容させることが必要であり、それに気づくこ

とから始めることが肝要なのである。人は何事においても自らの周りの環境のせいになしがちであるが、自らの環境の在り方を決めるのは自分自身、自己、自らの心である。自らが改善し変容することにより、環境も改善されていく。

充実した生活を送るための心の環境作りのためには、環境に対する心の持ち方が極めて重要であり、積極的な心の状態、感謝の心を絶えずいだきつつ、前向きな姿勢をとることが肝要となる。

同様に、自らの周りの環境が順境にあるか、逆境にあるかについても、自らの心の環境が順境にあるか逆境にあるかによるということを、『言志叢録』第133条では次のように述べられている。

○余意ふ、天下の事、固より順逆無く、  
我が心に順逆有り、と。  
我が順する所を以て之れを視れば、逆も皆順なり。  
我が逆する所を以て之れを視れば、順も皆逆なり。  
果たして一定有らんか。  
達者に在りては、一理を以て権衡と為し、  
以てその軽重を定むるのみ。〔『言志叢録』第133条〕

【大意】世の中の事には 元来、順境、逆境とういものはないのであり、あるのは自らの心が順境か逆境かどうかである。自らの心を順境にして、自らの環境を観れば、たとえ逆境であっても自分にとっては順境ととらえることができる。また逆に自分の心が逆境であれば、たとえ自らの環境が順境であっても、自分にとっては逆境となる。このように自らの心の環境により順境か逆境かが決まるわけであるが、物事の事理に通達している人は、心に一貫する道理をもち、それを物差しとして順逆の軽重を判断する。

心の持ち方によって順境、逆境が分かれる。「我が心に順逆有り」とはまさに至言である。また自らの環境を変えるためには、自らが変容することが肝要となる。

自らの環境づくりは、結局は、環境との相互作用を通じての自らの心の環境づくりに他ならない。心の環境づくりこそが、充実した生活を営む上での鍵を握ることになる。

『言志叢録』第75条は、心の環境づくりが充実した生活を送る鍵を握ることを簡潔に示している。

○人は須らく快樂なるを要すべし。

快樂は心に在りて、事に在らず。

〔『言志叢録』第75条〕

【大意】人はみな楽しむことが必要である。楽しみは、自らの心の中に生じるのであり、周りの物・事から生じるのではない。

この条文は、相田みつをの有名な詩「しあわせはいつも自分の心が決める」<sup>7)</sup>と同じ内容を表している。しあわせは、自らの環境の受け入れ方、感じ方に存しているものであり、環境に対しての心の環境づくりがその鍵を握ることを端的に示している。この条文は、心の持ち方・工夫において有益な示唆を与えている。「快樂は心に在りて、事に在らず。」は、自らの心の持ち方によって、しあわせかそうでないか、楽しいか楽しくないかが決まることを明白簡易に述べている。心を絶えず積極的な状態に保ち、どのような状態に身を置こうとも、前向きに生きることが肝要である。

人間は、環境の中に身を存し、環境から刺激を受け、またそれに対して環境に対して刺激を発しながら生きていること、環境に対しての心の持ち方を通して、自分の在り方・生き方が形成されていることを、改めて理解する必要があるだろう。

自らの心の環境づくりにおいて欠かせないのが、環境との関わりの中の反省的思考である。この反省的思考については、既述したが、最後に、反省的思考による心の環境づくりの重要性を指摘したい。

この反省的思考については、環境とのかかわりの中での瞬間瞬間の反省、瞬間瞬間の気づきが重要であるが、自らの環境から離れて、自らの内面と向き合い、じっくりと時間をかけて行う反省的思考も、心の環境づくりにっては必要である。

『言志叢録』第50条は、反省的思考としての自省による心の環境づくりの重要性を述べている。

○端坐して内省し、心の工夫を做すには、  
宜しく先づ自ら其の主宰を認むべきなり。  
省する者は我れか、省せらるる者は我れか。  
心は固より我れにして、軀も亦我れなるに、  
此の言を做す者は果して誰か。  
是れを之れ自省と謂ふ。  
自省の極に乃ち靈光の真我為るを見る。  
〔『言志叢録』第50条〕

【大意】心を工夫する際に、まず認識すべきことは、その心の主宰者は自分であるということである。人間の内にある一大活物である心を養い、道理に従わせるのも主催者たる自分である。心は自分の中で生きている。よい方向に成長発達させていくべきである。また絶えず、心に栄養を与え、元気な状態を保つべきである。

このように、内省による心の環境づくりも時として必要である。人は、人との関わりの中で自らを磨いていくが、時には自らの環境から身を離れ、自らと向き合い、環境とのかかわりにおける自己の在り方を内省することが、心の環境づくりにつながり、成長した自己によってまた環境との相互作用が展開する。

環境を「学び」の対象ととらえ、感謝の心を抱き、自己の成長につなげるためにも、内省による反省的思考は必要である。

## VI. おわりに

本稿では、充実した生活を送るための心の環境づくりについて、先人の思想、特に江戸時代の儒学者である佐藤一斎の『言志四録』を中心にして展開してきた。

充実した生活を送るためには、自らの環境との相互作用において、自らの環境に対する働きかけ、則ち環境に対する具体的な行動力を高め、それに対する反作用としての環境からの具体的な結果を受け止めることを指摘してきた。行動力を高めるためには行動する勇気を涵養する必要がある、それが結果を受けとめる勇気であるとも指摘してきた。

充実した生活のための環境づくりは、心の環境づくりであり、その心をもって環境と相互作用すること、それが自らのやりがい、生きがいにつながることで、また自らの自己改善・自己変容・自己向上こそが、結果として環境改善につながることを改めて認識することが肝要であることも指摘してきた。

充実した生活を送るためには、自らの環境を自らを磨いてくれる「学び」の対象ととらえ、環境に対して感謝の心をもって接することが重要であることも指摘してきた。

以上のように指摘してきたことを図示すると【図1】<sup>9)</sup>のようになる。

人間が充実した生活を送るためには、環境に対する感謝の心を持つように自らの心の環境をつくること

必要であり、自らの心の環境づくりそのものが、自らの環境を充実したものにしていくこととなる。また自らの環境を改善することは、自らの環境に対する心の環境づくりが肝要であることに気づくこと、「学び」の対象としての環境からの「学び」の機会をとらえて、瞬間瞬間の善処が肝要となる。

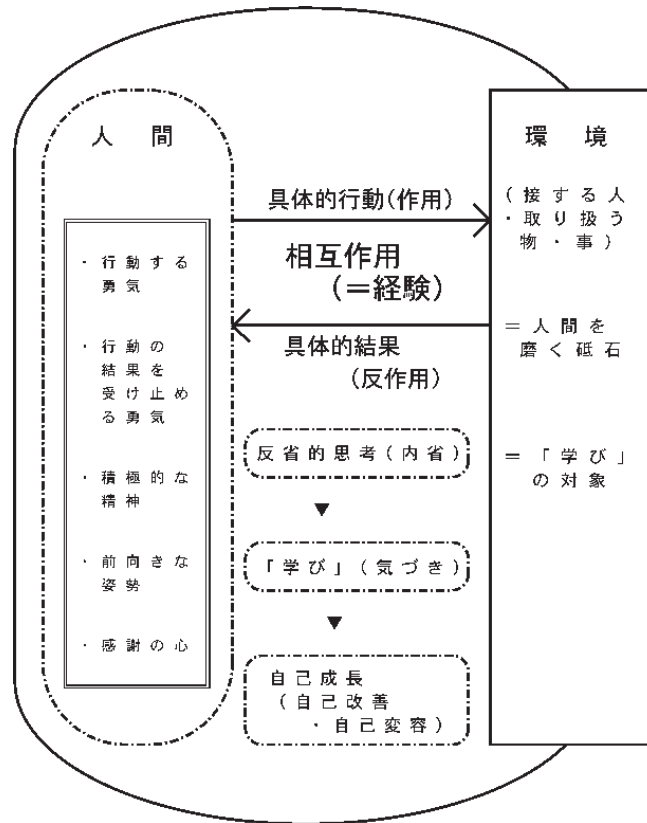
人間と環境とのかかわりは、人間がこの世に生を受けてから、一生を終えるまで続く。人間は環境との相互作用によって生を実感する。人間の生活は、環境との相互作用の連続であり、相互作用の対象である環境を「学び」の対象ととらえる心の環境づくりが、人間として「学び」続ける営み、絶え間ない自己向上の営みを可能にすると思われる。

## 【注及び引用文献】

- 1) 川上正光全訳注『言志四録（一）（言志録）』講談社、学術文庫、1978（昭和53）年、12頁～13頁、山崎道夫著『佐藤一斎』（シリーズ陽明学・24）明徳出版、1995（平成7）年の11頁～12頁をもとに記述した。
- 2) 川上正光、前掲書、12～13頁。
- 3) 川上正光、前掲書、16頁。
- 4) 相田みつを著『人間だもの』文化出版局、1994（平成6）年、36頁。
- 5) John Dewey, *Democracy and Education—An Introduction to the Philosophy of Education—*, 1916, Macmillan Company, p.140.
- 6) 新渡戸稲造著『修養』タチバナ教養文庫、2002（平成14）年、109～110頁。
- 7) 相田みつを著『しあわせはいつも』文化出版局、1997（平成9）年、3頁。
- 8) 図1は、デューイの『民主主義と教育』にみられる内容と佐藤一斎の『言志四録』の内容をふまえて、筆者が独自に作成した。

## 【主要参考文献】

- 岡田武彦監修『佐藤一斎全集』第1巻、明徳出版、1990（平成2）年。
- 岡田武彦監修『佐藤一斎全集』第11巻、明徳出版、1991（平成3）年。
- 岡田武彦監修『佐藤一斎全集』第12巻、明徳出版、1991（平成3）年。



【図1】

- 川上正光全訳注『言志四録』(一)～(四), 講談社, 学術文庫, 1978 (昭和53)年～1981 (昭和56)年。
- 高瀬代次郎著『佐藤一斎と其門人』南洋堂, 1923 (大正12)年
- 山崎道夫著『佐藤一斎』(シリーズ陽明学・24), 明德出版, 1995 (平成7)年。
- 久須本文雄全訳注『座右版 言志四録』講談社, 1994 (平成6)年。
- 子安宣邦監修『日本思想史辞典』ペリカン社, 2002 (平成14)年。
- 山田 準著『言志録講話』明德出版, 1998 (平成10)年。
- 岡田武彦著『ヒトは躰で人となる』登龍館, 2001 (平成13)年。
- 樋口清之著『日本人の育ての知恵～しつけと教育の源流を探る』PHP文庫, 1989 (平成元)年。
- 相良亨著『日本の思想』ペリカン社, 1998 (平成10)年。
- 上寺康司「佐藤一斎における教育思想の現代的意義

- ～『言志四録』に焦点をあてて～, 中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第47巻, 第一部, 2001 (平成13)年。
- 上寺康司「『全体の奉仕者』としての教員に求められる使命感に関する考察～佐藤一斎の『言志四録』を主なたがかりとして～」, 『福岡工業大学研究論集』第37巻第1号, 2004 (平成16)年。
- 上寺康司「佐藤一斎の『言志四録』にみる『学び』のための心の工夫」, 『福岡工業大学研究論集』第37巻第2号, 2005 (平成17)年。
- 上寺康司著『増補補訂版 現代教師に求められる人間的資質』クオリティ出版, 2002 (平成14)年。
- Joh Dewey, Democracy and Education—An Introduction to the Philosophy of Education—, 1916, Macmillan Company.